

BOOK REVIEW 1

3D 世紀 - 驚異! 立体映画の100年と映像新世紀 -

大口孝之, 谷島正之, 灰原光晴 著
ボーンデジタル ISBN 978-4862461506 2012年発行

評者: 山峰潤也 (東京都写真美術館)

本書は3D映画ジャーナリストの大口孝之氏, アジア初のデジタル3D映画『戦慄迷宮3D』のプロデューサーである谷島正之氏, 株式会社IMAGICAで長年3D映像制作に携わってきた灰谷光晴氏によって書かれた, 632ページに渡る3D映像の教科書とも呼ぶべき大書である。

本書では3名の著者がそれぞれ, 3D映像の歴史, 実制作, 原理を一章ずつ担当。各章充実した内容だが, 中でも大口氏によって書かれた3D映像史は世界的にも例を見ないほど詳細に書かれている。3D映画ジャーナリストであるとともに, 3D映像関連資料の有数のコレクターでもある大口氏の徹底したリサーチは, 国内で他の追随を許さず, その3D映画への情熱と愛情には驚愕させられるが, その一方で本章は3D映画の素晴らしさを偏愛的に語ることに留まらず, 栄枯盛衰を繰り返した3Dの歴史と未来への示唆に富んでいる。

一般的に3D映像と呼ばれる視覚装置は, 人間の2つの目に生じる視差を利用した空間把握能力(立体視)を利用し, 平面に描かれた(映し出された)世界を立体的に見せるシンプルな視覚効果によって支えられている。3D映像は先端技術と捉えられがちだが, その歴史はダゲールが世界初となる写真(ダゲレオタイプ)を発表した約170年前まで遡る。本書では1895年のリュミエール兄弟による映画の発明から, 今日の映像技術に至る歴史のなかで, 立体映像に魅せられた人々の探求が余す

ことなく書かれている。中でも, 19世紀末の映像技術を取り巻く血なまぐさい特許競争や, 1930年代という映画黎明期にありながら独自の展開を見せたソビエトの裸眼3D劇場にまつわるエピソードなどから, 熾烈を極めた技術開発の歴史を垣間見ることができる。また, 世界各地で制作された700本以上の3D映画を時代や国ごとに紹介した網羅的

な3D映画史は非常に資料的価値の高い内容となっている。

谷口氏による第2部では, 著者自身がアジア初となるデジタル3D映画に挑戦した時の企画立案からチーム編成, 実制作といった体験記が臨場感あふれる内容で書かれており, 映画製作を目指す人にとっては, 新しいものに取り組む現場の空気に触れる絶好の機会となる。灰谷氏が担当した第3部では, 立体視の仕組みの図解から最新の機材や技術までが解説されており, 空間把握の仕組みと最新の3D装置について理解する

ことができる。

本書は3D映画を中心に構成されているが, 映像史に彩りと刺激を与え続けている3D映画の歴史は, 未知なる視覚体験への欲望と飽くなき探求の歴史であるため, 映像制作に関わる人にはぜひ読んで頂きたい内容である。

